

闇にきた光

[ルカによる福音書 2 章 1～20 節]

そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録をせよとの勅令が出た。これは、キリニウスがシリア州の総督であったときに行われた最初の住民登録である。人々は皆、登録するためにおのおの自分の町へ旅立った。ヨセフもダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。身ごもっていた、いいなずけのマリアと一緒に登録するためである。ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。

「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。」

天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」と話し合った。そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。その光景を見て、羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。聞いた者は皆、羊飼いたちの話をも不思議に思った。しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりにだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

[ヨハネによる福音書 1 章 5、14 節]

光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。

言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。

[1] 讚美歌とは、闇の中の「光」

有名な聖書の言葉にこのような言葉があります。—「わたしは裸で母の胎を出

た。また裸でかしこに帰ろう。…主の御名はほむべきかな」。旧約聖書 ヨブ記の 1 章にあるヨブの言葉です。理不尽な苦しみを舐めなければならなかったヨブですが、不思議とこの言葉には暗さがありません。「主の御名はほむべきかな」と讚美をしています。今日は**クリスマス・イブ**。この世の中には沢山のクリスマスの讚美歌があって、私たちもその中の何曲かをご一緒に歌っていますけれども、私は、「讚美」というのは「闇の中の光」のようなものだな、と思うことがあります。

讚美歌の中には明るい曲調だけでなく短調の歌もありますけれども、それでも暗くはないのです。むしろ深い慰めに満ちています。それは何故なのか考えてみました。それは主イエス・キリストの「光」が、そこにあるからではないでしょうか。クリスマスは、この「光」なる主イエスが私たちの所に来て下さった日。あのヨブがいみじくも語ったように、或いは歌ったように、私たちもこのクリスマスの夜、ヨブに倣って、讚美をすることが出来るのではないかと思います。—「わたしは裸で母の胎を出た。また裸でかしこに帰ろう。…主の御名はほむべきかな」。…そうです。この夜、神様が私たちに所に来て下さったということは、私たちはどこから来てどこへ帰るのか、その人生の拠り所を知らされたということです。

[2] 「裸」で生まれた救い主

私たちは皆「裸」で生まれましたよね。そして「裸」で死んでいきます。先ほど読んで頂いたルカ福音書 2 章の中にはこういう言葉がありました。—「あなたがたは、布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。」—この**幼子イエスは裸で生まれた**のです。だからわざわざ「布にくるまって」と書いてある。これは当たり前ではないなと思ったんです。本当に何の飾りもない無防備な乳飲み子としてイエス様はやって来た。それはまた私たちの人生の出発点の姿です。そこには何の社会的価値観もついていませんね。権力、社会的地位（偉いとか偉くないとか）、財産とかそんなものを握って生まれてくる子はいないです。私も今年、長女の家で初めての子が生まれたんですけれども、生まれたばかりの赤ちゃんを抱くと、「命そのもの」がここにあるなあと、とても平和な気持ち、優しい気持ちになりますよね。神様は、イエス・キリストを裸の存在、全く素朴な、命そのものとして地上に送って下さいました。そこに、すべての人間に対する祝福があると思うのです。

クリスマス物語の中で**羊飼**いが出て来ました。当時の羊飼いの仕事は、社会的に尊敬されているというよりは逆に大変過酷で貧しい仕事であったと言われます。この当時の**住民登録** (!) の対象からも外されていたようです。私たちが人生で一番悔しいと思うことはどういうことでしょうか？—「あなたの代わりは

いくらでもいる」と思われることではないでしょうか？この羊飼いたちもそう思われていた存在だったと思います。片や、**ヨセフとマリア**も社会的地位がある夫婦ではありません。彼らは**皇帝アウグストゥスの勅令**を受けて、身重でありながら住民登録の為に旅をし、また家畜小屋で赤ちゃんを産まなければならない、本当に庶民の夫婦、貧しい夫婦だったのです。マリアが歌った賛歌の中に、「**数に足らぬはしためをも**」とありますけれども、社会的に、或いは勝手な人間の「評価」の世界の中では重んぜられる何ものも持ち合わせていない存在として、このマリアも、ヨセフも、そして羊飼いたちも描かれているのです。しかし、この**何も虚構の飾りが無い、裸の存在**は何と幸いなことでしょうか！一天の御使いはハッキリとした声で語ります。「**あなた方のために救い主がお生まれになった**」と！。

[3] 「人をイコールで見ない」方

つい最近新聞を読んでいて、「ああ、この言葉はいい言葉だなあ」と思った言葉がありました。それは「**人をイコールで見ない**」という言葉です。誰の言葉かという、今から丁度50年前に起こった沖縄市（当時コザ市）での所謂「コザ騒動」を目撃した古堅宗光（そうこう）さん（沖縄市観光物産振興協会の認定ガイド、73才）が、修学旅行などで沖縄にやってくる学生たちに語っている言葉です。「コザ騒動」というのは、派手な映像が残っていますから民衆の暴動と捉えられてしまうことがありますけれども、それは一面的で、沖縄の人たちは甚だしい人権侵害を受けていました。米軍の車で交通事故死した主婦の事件も無罪、繰り返される犯罪、不当解雇、また兵器用の毒ガスが漏れるような事故がコザ市近くでもあり、**鬱憤した不満**が爆発し、「アメリカや一、沖縄人を虫けらみたいに扱いやがって。思い知れ一」と、アメリカの車などに火をつけたという事件です。6時間余りで収束したとのでそれ以上にはならず済みました。参集した民衆は約4千人。当時若かった古堅さんは近所に住んでいて「革命が起きたのか」と思ったそうです。

この事件は様々に評価出来るのだと思いますが、確かなことは、これが計画的組織的なことではなかったこと、一人も死者が出ず、略奪もなかったことです。沖縄の人々の憤懣やるかたない思いが表面化した事柄と言えらると思います。今でも沖縄は、アメリカファーストな日米地位協定の存在や、「沖縄に寄り添う」と言いながらアメとムチで支配している日本政府の姿があります。ずっと痛みを握りしめ、しかし、他者と共に生きるために明るく生きようとしている人々がいます。古堅さんもその一人なのです。修学旅行生たちに「**人をイコールで見ないでほしい**」と語るのです。その意味はこうです。—「**米国人だから、日本人だから、肩書が立派だからこういう人…と、固定観念でとらえず共存を図って欲しい**」と。人間をイコールで見るな。〇〇なのだからという色眼鏡で見るなど。不思議とこのよ

うな言葉は、世の権力者たちからは出てきませんね。本当に人の痛みを知っている人、傷を負っている人だからこそその言葉だと思いました。説得力を持つのです。

主イエス様は「互いに愛し合いなさい」(ヨハネ 13:34) と言われました。ある意味、誰もが言える常識的な言葉と思われるかもしれませんが。けれどもイエス様のこの言葉は前提があるのです。それは、「わたしがあなた方を愛したように」です。イエス様は人を偏り見ません！「すべての人」が愛されているのです。それこそ人をイコールで見ません。そうでなければ、最も弱い乳飲み子としてこの地上にやって来なかったと思います。そうでなければ、十字架の上で死ななかったと思います。「父よ、彼らを許して下さい。何をしているのか分からないのです」(ルカ 23:34) と祈りながら死ななかったと思います。—飼い葉桶で裸で生まれた主イエスは、十字架の上でやはり裸で死なれたお方です。…それは、私たちの命が、神様の光に招かれるためです。あの羊飼いたちと同じように、闇と思われる人生の中にも、讚美が響くのです。天から光が私たち目がけて届くのです。いや、もう既に届いているのです。—「闇の中を歩む民は、大いなる光を見、死の陰の地に住む者の上に、光が照った。」(イザヤ 9:1)。「光は暗闇の中に輝いている」(ヨハネ 1:5)。「輝いている！」。現在形です。—私たちも、心を裸にして、羊飼いたちと共に、主とまみえるために進んでいきましょう。讚美を歌いながら！

皆さまお一人ひとりの上に、クリスマスの恵みが豊かにありますように！

(祈り) 主よ、2020年、この年もあなたのご降誕をこうしてご一緒に迎えることが出来ます恵みを心から感謝致します。私たちは裸で生まれた存在であるのに、何と人を分け隔てしたり偏見を持ってしまう者でしょうか。或いは自分の命をも何の価値もないと諦め、絶望してしまう者でしょうか。しかし、そうではないことをあなたはまことの光なる御子イエスを私たちの為に与えて下さることで確かなものとして下さいました。私たちが、またこの世がどれほど大きなあなたの愛の中に置かれていることか、そのことを教えて下さい。「私は裸で母の胎を出た。また裸でかしこに帰ろう。主の御名はほむべきかな。」羊飼いたちが主と出会って、讚美しながら自分の場所に帰っていったように、いついかなる時も心に讚美の光を持たせて下さいますように。そして、主にあって「互いに愛する」ことが出来ますように。

今日、この場を覚えながらもご主席出なかったお一人ひとりの上にも主イエスの光が確かに届けられますように！主イエス様の御名によってお祈りします。アーメン。